

DEBUT 首長

岩手県平泉町長 青木 幸保氏

深みある観光地を目指す 次世代加速器施設も誘致

平泉町 仙台と盛岡のほぼ中間に位置する岩手県南部の町。平安末期の藤原氏3代の栄華を伝える中尊寺金色堂などが世界文化遺産。東日本大震災から3カ月後の登録は東北の人々を勇気づけた。県を代表する観光地だが、1～10月の観光客は約168万人と前年同期比8%減。

——世界遺産登録から3年半。観光客は減少している。

「連携」がキーワードだ。ここ岩手県南地方には、平泉の世界遺産のほか、花巻の宮沢賢治や温泉、遠野の民話、前沢の牛肉、一関の餅、江刺のリンゴなど様々な観光資源がある。これらを組み合わせれば魅力的な旅行商品ができる。きちんと手を組み、発信力を高めていく。

世界遺産の価値を皆で共有し、磨き上げることも大事だ。朝、登校途中の子どもたちが観光客に「おはようございます」とあいさつする。それだけで「世界遺産の町は違うな」と思われる。ゴミを拾ったり、トイレを聞かれた時に丁寧に教えたりするのも日常茶飯事だ。

私が子供の頃は平泉のことなど通り一遍にしか学ばなかったが、今の子どもたちは小さい頃から丁寧に学んでいる。幼稚園

で^{うたい}謡に触れ、小学校で歴史を学ぶ。中学ではそれまで学んできたことの発信に力を入れ、修学旅行先などで平泉をPRしている。深みのある観光地になることが「地域力」を高めることにもつながる。

——2040年には生産年齢人口が46%減の見通しだ。

実は選挙で「東京から移住した」「千葉から来た」といった人に数多く出会った。町は世界遺産登録より前に景観条例を定め、高さや色を制限してきた。「自由に建てたい」と出ていく人もいるが「平泉だから住みたい」と来る人も多い。こうした特異性は大事に生かしていく。

今夏、スイスの欧州合同原子核研究所（CERN）を訪れた。2000人ほどだった地区がCERNができて2万人の町になったという。我々は次世代加速器施設、国際リニアコライダー（ILC）誘致を目指している。科学者は「北上山地に建設」で一致したが、まだ国が決断していない。東北全体の復興の推進力になる事業だ。国に1日も早い決断を働きかけたい。



あおき・ゆきお 1954年岩手県平泉町生まれ。県立水沢農業高校卒業後、農業に従事。88年から町議会議員。副議長、議長など歴任。13年県町村議会議長会会長。今年7月に辞職、8月の町長選で初当選。家族が肉牛を生産。60歳。

ILCが実現すれば、産業面だけでなく教育や文化レベルも向上する。子どもたちの夢や希望にもつながる。800年前に藤原氏が目指した「東北の自立」を実現するチャンスだ。

——大型投資が控えている。

財政が厳しく「あれもこれも」は無理。「あれかこれか」になるが、道の駅やスマートインターチェンジ（IC）の建設は積極的に進めたい。

道の駅は農業と商工業を連携させる大事な事業だ。農業情勢が厳しさを増す中、町の農業をけん引していける農家や農家集団を育てる。スマートICは企業誘致や住宅建設などにもつながる。三陸の産物を平泉で引き受け、ここから全国に配送する流れもできるだろう。

一方、体育館の建設計画は検討し直したい。老朽化した公民館や図書館などの公共施設を一体的に考える視点も重要だ。（聞き手は

盛岡支局長 増淵 稔）